

急ぎ過ぎだよ 人類は。  
ゆるやかなネットワークを目指す

ITより  
逢いてエ

# 雑報 縄文

いろは考之があるが面白い  
いろは人がいるが楽しい

No. 662

2023年10月<sup>9</sup>刊

編集・発行 鈴木厚正

〒266-0005 千葉県緑区菅田町2-21-359

T&F 043-291-2917

も・く・じ

- 「18世紀の秘密外交史」について 2
- 「最初に飢えるのは日本」など 5
- お便りから 9
- 夏油温泉と終塚山 16
- 山仕事 (9月、大平) 21
- け・い・じ・ばん 24

そうさせた  
歴史を考之  
よう。

ハマスはひどいが  
イスラエレもむごい。  
戦争はだめだ

「日本国憲法がやけに眩く見え」

静岡県 横田博

10月13日「朝日川柳」



泉ゆきを「じはいつも山頭火」  
(日本習字普及協会)

10月 日現在の  
会員数208名

この見本誌をみて新たに

「読んでみようか」という方は、  
年会費 4,000円を

郵便局で 00100-2-20630  
「雑報友の会」  
へ 申し込み下さい。

題 字 故 佐村隆英和尚 (千葉県長柄町本光寺住職)  
カ ッ ト 故 泉ゆきをさん (にっぽん箱絵の会会長)

印刷機 リソグラフ RZ 330

※この号の切手は、ぽすくま。

## 山仕事(9月、大平)

今回、出かける直前に、思いがけない話題が生まれた。9月4日(月)夜のNHK-TV「鶴瓶の家族に乾杯」に、久米真弓さんが顔を出したのだ。

舞台は静岡・掛川市。鶴瓶と静岡出身の広瀬アリスが掛川市を訪ねる。二人の待ち合わせ場所は、同市の事任(ここのま)八幡宮。鶴瓶が宮司と話しているところに、社務所の中から白い衣装を着た久米さんが顔を出し、何か話しかけた。短い時間だが、翁れもない久米さんで、画面に名前も表示された。前もて何も知らされていないかたのことだが、平然としていたのは流石だった。あとできくと、たまたま人手が足りず臨時に頼まれたとのこと。

これを喜んでのが山ちゃん。顔を合わせると「巫女さん、ミユさん」とはやす。そのたがに「巫女じゃないよ」とやり返していた。

9月6日(水、くも)、夕方雨。ぼくはひと足早く行って天浜線のシルバーパスを購入。年間6000円(掛川~敷地間の片道運賃は600円)と安い。乗車の都度100円を支払うことになっている。

今回参加は、原江、原田、山崎さんとぼく。敷地駅で迎えてくれたのは、正士、久米、深谷孝さん。買物から戻ると竹中さんが見えた。

竹中さんは、正士さんに頼まれて倉庫内の保冷庫の点検。今秋収穫する米を収納するのだ。英ちゃんは、破れた網戸の修理。そのため山ちゃんが家から工具を携ってきてくれた。

網戸が直ったところで深谷さん、英ちゃん、山ちゃんと4人で茶園の草刈りに出ようとしたところ、符っていたように雨が降りだした。

倉庫の中では竹中さんがアースの取り付けに苦戦している。地中に電気を逃がすアース線を外に出す穴がないのだ。壁に穴をあけようとしたが、コンクリートに断熱材をつけた壁の厚さは80cm近くもある。天井に付いた換気用の太いビニル管に穴をあけることになった。深谷さんと英ちゃんが壁の外に立ち、位置を確かめながら竹中さんが内側からドリルで穴を明ける。

その間、ぼくには出番がない。そこで先にシャワーを使わせてもらった。浴室内でアブと蚊を一匹ずつやっつけたのが、この日ぼくがした唯一の仕事だ。

夜、青山さんがザリに山盛りのシイタケのフライを拵って見えた。さらに、珍しく齋藤俊行さんがビールと野菜、黒ニンニクを携えて参加。伊藤英雄さんと野菜作りに入身が入り、直売所に出荷するようになったとのこと。このころ、お母さんも夕食に参加するようになったのはよいことだ。

原江さんと久米さんが調理してくれた夕食は、

(夕) 刺身(カツオ、ボイル剣先イカ)、キクラゲとタコとワカメの酢の物、キクラゲと

新ウグイスに竹の子とオクラのネバネバ和え、シラス干しと大根おろし。それにソメシメと米さんのだしとかえし。

9月7日(木)、くも一時雨。竹中さんは所用でお休み。9:30、水窪から守屋千鶴、熊谷道子さんが見える。

正士、久米さんも加わり、厨房の奈江さんを除く全員で茶園にめぐる。5人が草をとる。山ちゃんが茶樹の裾刈り、英ちゃんが竹中さんの散布機で油粕を散布する。春野町から尾上美智子さんも応援に駆けつけてくださった。

すごい草だ。敵間の向こうにいる人の姿が見えないほどの草丈と量だ。お母さんが元気がよいのは、茶樹の根元にうずまり、草を根元から抜いていた。そして腰が90度に曲がったままだった。今回、水窪のお二人は同じようにきれいに取り除いたが、ぼくは雑。それでも、茂ったところは2mほど草をとるとひと抱えとなり、外に運び出さねばならなくなる。そこで考えた。ぬいた草をいったん茶樹の上に置き、あとで茶樹の上を転がしよから丸めて搬出することにした。その間、久米さんがハチがアブに刺されるという場面も。

(昼) 水窪のお二人が持参した、トリゴホウゴ液、醤油汁、ナスの味噌炒め、カボチャとインゲンの煮物、キュウリの粕和え、サバの煮付けに漬物三昧(キウちゃん、ナスとシソの酢漬け、珍しいマクワウリの粕漬け)。

わざわざ炊飯器持参だから凄い。尾上さんからシフォンケーキ、水窪から水ようかんもいただし、お母さんも一緒に。

午後も作業が続く。正士さんは今回、どうしても茶園の施肥を終わらせたいのだから力が入る。

そのさなか、16時近くに山中圭子さんに伴われた草野香一さんが見えた。草野さんに植樹用の持山250坪を提供した通称「山じい」も一緒だ。さらに、久米さんの住む森町薬場の自治会長栗田さんも同席された。

こちら側には、正士さんをはじめ久米さん、少し遅れて千葉ちゃん(野口江さん)も加わった。栗田さんも話を聞く側だ。

草野さんは40代。サラリーマンの傍ら「個人植樹」という事業を始めた。手始めに浜松市の「山じい」の持山250坪を借りて、そこに子どもたちが各自好みの木を植える。その後の管理は地域のボランティアにやってもらい、20年後に自分が植えた木と再会。その木を使って何かを作る(例示したものが「床柱」というもの)。

専ら山中さんと久米さんから発言が続いた。お二人の質問や意見は的確で鋭い。草野さんの計画は地に足のついた感じがなく、何となくウグイスの巣に卵を産み、あとの世話はウグイスに任せるといふホトトギスの花卵を思わせる。「地球環境の保護」や「子どもたちの未来への感動を紡ぐ」といった言葉がちらばめられている。

が、具体性がなく、説得力に乏しい。問いに対する答も自信が無さそうと窮すると突然話題を変えたりする。栗田自治会長も疑念を感じたようで、言葉に鋭さがあった。対話の終り頃には、山本真由美さんと若林さんも同席した。

黙ってきいていた正士さんが最後に「残念ですが、私の山林を提供する気になれません」と引導を渡し、対話は終わった。

ぼくには、近頃多い起業家タイプに思えた。いまは草野さん一人だが、この後、適切な助言者が現れれば、協力する人も出てくるのではないか。

その間、尾上、舟屋、熊谷さんと原田、山崎さんが頑張ってくれた。女性方は8時頃まで、男性二名はさらに遅くまでかかって茶園の草取り、雑刈り、施肥を完了してくれた。お疲れさま。これで正士さんも安心したことだろう。

夕食には、お母さんと哲史さんも加わった。主として原江さんが調えてくれた夕食は、(夕)サーモンのバター焼き、春雨の中華風サラダ、ジャガイモのタラコ炒め、焼きカブの酢味噌、ハンパンのピカタ、厚揚げ焼、明木マヨネーズ。それに、又いぶり正士さんの手打ちソバと又米さんのだしとみそでいたたき。

台風13号が思いがけず東海から関東を準判しのコースをとることになり、急にながら山ちゃんとお母屋で寝る。

9月8日(金)。当地の雨は止んだが、東海道線(熱海～小田原間)や関車の右来線が各所で運休という。そこで、朝帰りすることにした。

朝食は、昨日の残りのトリゴ飯にゴーヤなどのスーージー(ジキサー持参でお二人が作ってくれてあったのだから)に尾上さんのシフォンケーキをいただく。

正士、又米、千葉、土屋さん(伊豆の下田市役所)に見送られ、天浜線で掛川の。掛川から原田さんも新幹線で東京へ。

ぼくは、千葉駅まではほぼ順調だったが、外房線が不通。駅でラーメンを食べて待ったが、動く気配がないので、バスで乗り継ぎ、15:25にぼくだ着。家に着くと停電していた。(結局、外房線が全通したのは、6日後の9月4日)